2022年度 地理学関連修士論文要旨

地方における女性移住者の経験とその変化－岩手県陸前高田市の事例から－

青木　彩杜美

日本における農村女性／農村ジェンダー研究や国内の移動とジェンダーに関する議論を概観すると，都市から地方へと移住する女性に焦点を当てた研究は少ない．さらに，近年の地方移住の質的な変化として，女性や若者の地方志向の強まりや，震災等の災害を契機とした被災地への移住者の増加が挙げられるが，その中で移住者一個人の経験に焦点が当たる機会は限られている．以上の背景を踏まえ，本研究では，岩手県陸前高田市をフィールドとして，地方，特に震災によって大きな被害を受けた地域における女性移住者の移住先での経験について，震災前後での経験の差異・変化とそれらをもたらした背景を明らかにすることを目的とした．

第２章では，研究の背景となる，地方における移住者の経験，とりわけ女性移住者ならではの経験について整理した．地方移住者の移住先での経験については，主に，「地域からの受容」「地域からの疎外」「地域からの期待」という３点があった．また，移住者の性別の違いが移住先での経験の違いをもたらしていることを，農村社会のジェンダー規範・関係に関する先行研究，さらに，女性移住者に焦点を当てた先行研究の内容を基に指摘した．

第３章では，本研究のフィールドである岩手県陸前高田市とそこへの移住を取り巻く状況について概観した．まず，陸前高田市の概況を紹介した上で，東日本大震災によるまちの変化を「まちづくり」「住まい」「産業」「祭り」といった観点を中心に整理した．さらに，人口統計に基づき，陸前高田市では転入人口の相対的な多さが人口の社会減少率の拡大を抑制している可能性を指摘した上で，震災後の市への移住者による取組みや，市による移住促進事業の現状について取り上げた．

第４章では，女性移住者を対象に行ったインタビュー調査の概要および調査における語りの内容についてまとめた．調査対象者は，県外からの移住経験のある女性10名であり，2011年の東日本大震災前後の変化を明らかにするため，震災前に移住した女性と震災後に移住した女性それぞれにインタビューを行った．女性移住者たちの語りについては，震災前と震災後の女性移住者，それぞれの移住先での経験を，①地元の人々との交流やつながり，②地域の組織的活動への参加経験，③陸前高田というまちに対する思い，という３項目に分けてまとめた．

最終章では，第４章までの内容を踏まえ，陸前高田市における女性移住者の経験について，震災前後での経験の差異とその差異をもたらした背景について考察した．まず，女性移住者の震災前後での経験の差異については，「地域からの受容と疎外」「地域からの期待」の二つに分けてまとめた．前者についてみると，震災前の女性移住者は移住後すぐに地域から受容され，スムーズに地域に馴染んだとは言い難く，むしろ疎外感の方が強かった．一方で，震災後の女性移住者は，疎外感を感じる機会もあったものの，それが大きな問題としてとらえられることは少なく，地元住民からは彼らの子や孫のような存在として概ね温かく受け入れられていた．また，後者については，震災前か後かにかかわらず，「よそ者」の度合いの高いＩターン者の方が期待されやすいこと，さらに，期待は震災後の方がより大きく，より多様な場面でみられるようになっていることがわかった．そして，こうした経験の変化をもたらした背景として，主に以下の２点があると考察した．第一に，震災前後で陸前高田市への女性の移住のあり方そのものが大きく変化したことである．震災前は婚入者が中心であったのに対し，震災後は，Ｉターン者，その中でもまちに対する強い思いを持った者が増加したことで，移住後に大きな不満やストレスを抱える女性移住者が少なくなったと考えられる．第二に，地元住民側の移住者に対する姿勢やまなざしが変化したことである．震災後，陸前高田ではまちの被災の規模が大きかったことで，「よそ者」に頼らざるを得ない状況になった．そして，復興の過程において，地元住民が外から来た人々と関わる機会が増加し，移住者に慣れたことで，移住者が地域に定着しやすくなったと指摘できる．

以上のように，本研究から，東日本大震災という出来事の前後で女性移住者の経験にさまざまな差異が生じるようになったこと，そして，その背景として震災を契機としたまちへの女性の移住のあり方やまちの人々の姿勢・価値観の大きな変化があるということがわかった．さらに，震災後，女性移住者を取り巻くさまざまな環境が劇的に変化したことで，震災前と震災後の女性移住者双方が地域の中で居心地の良さを感じられるようになってきた可能性もあると指摘した．

（本誌にフルペーパーを掲載．指導教員：倉光　ミナ子）